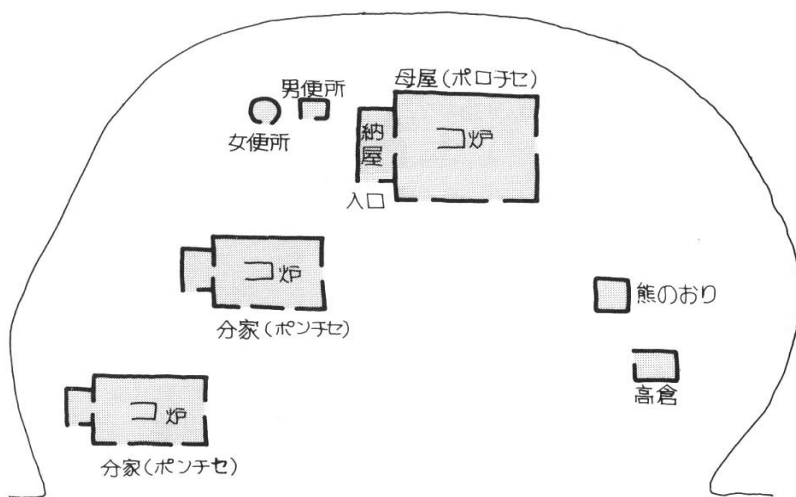


ほっかいどう 北海道 アイヌの家

ほっかいどう せんじゅうみんぞく
北海道の先住民族であるアイヌが、19世紀末ごろまで暮らしていたコタン（村）を、アイヌの人びとの協力（さいげん）で再現（しきち）しています。敷地（おく）の奥にあるのが両親（てまえ ふたむね）の手前（ふんげ）の2棟が分家（ろ）した子どもたちの家（ねどこ）です。アイヌの人びとは炉（ろ）を神様の寝床（ねどこ）と考えたため、家は炉を中心に造られています。



けんちくざい とくちょう 【建築材の特徴】

やね かべ
屋根や壁に使われているのはイネ科の植物（アイヌ名：ラペンペ）で、1本1本がストローのような中空構造（ちゅうくうこうぞう）になっています。これらを束ねると厚い空気（あつ）の層（そう）ができ、断熱材（だんねつざい）と同じ役割（やくわり）をはたします。アイヌは古くからこの資材（しざい）の特性（とくせい）を活かし、自然の断熱材（だんねつざい）で家（い）をまるごと覆（おお）うことで、寒い時期（ひかてき）でも比較的（ひかくてき）あたたかく暮らすことができたのです。

かんたいへいようこうえき

環太平洋交易

アイヌ民族は、東北地方の北部から北海道、樺^{からふと}太南部、千島^{ちしまれつとう}列島にかけて古くから暮らしてきた先住^{せんじゅうみんぞく}民族です。かつてはアイヌモシリ（アイヌ民族の大地）の豊かな自然環境^{しぜんかんきょう}を基盤^{きばん}として、採集^{さいしゅう}・狩猟^{しりよう}・漁労^{ぎょうろう}を中心とした生活を営^いむ一方、本州^{ほんしゅう}や大陸^{しよみんぞく}の諸民族とも活発な交易^{こうえき}をしていました。アイヌによる交易は、大陸と日本をつなぐ架け橋^かの役目を果たしていたと言われます。

アイヌは製鉄^{せいてつ}の技術^{ぎじゅつ}を持っていませんでした。そのため、南方では和^わ人との交易で、生活必需品^{ひつじゅひん}である鉄の小刀^{なべ}や鍋^{なべ}を手に入れました。米や酒、タバコなども好まれました。その代わりアイヌは和人に、テ^{しん}ン、キツネ、アザラシなどの毛皮や、清（現在の中国）からもたらされた織物^{おりもの}などを渡しました。これを和人は蝦夷錦^{えぞにしぎ}と呼び珍重^{よちんちよう}しました。北方では、山丹人^{さんたんじん}と呼ばれた大陸のツングース系の人びとと交易し、アイヌは交易品^{こうえきひん}として毛皮のほか、和^や人より入手した鉄製品の一部を渡していました。山丹人からの交易品には、矢羽^{やばね}に用いるワシの羽根や、薬とするセイウチ^{きば}の牙などがありました。蝦夷錦も山丹人との交易^えで得たものでした。

こうした交易は「環太平洋交易^{かんたいへいようこうえき}」と呼ばれています。江戸時代、徳川幕府が鎖国^{さこく}を始めてからもこの交易は引き続きおこなわれ、中国の織物^{けいぶ}は長崎からばかりでなく、アイヌを経由^{けいゆう}しても入ってきました。そのため、この「環太平洋交易」を、「北のシルクロード」と呼ぶ研究者もいます。